

然限回紇、朝會不能自達于朝」とし、唐會要葛邏祿の項にも略ぼ同様の記事を載せたれば、當時回鶻が此等の葛邏祿及び黠戛斯と相争ひたりしものなることは疑ふ可らず、次の可汗牟羽の立つに及びては、間も無く自ら師を率ゐて南せしに想到せば、或は磨延賧の時代には此等北方諸部との争の爲に、其の行動を制せられたるには非ずやとも思はる。

此の推察は磨延賧に關して、單に肅宗即位以後に於る事件のみを記せる漢史の記載に基づきて試みたる所なりしが、其の後 *Sine-usu* 附近より發見せられたる此の可汗の紀功碑を見るに及びて、此の可汗の一代が殆んど全く近隣諸部との争を以て終れるを知り、益々上述の推察の誤らざるべきを確かむるを得たり、此の碑文の記事は今殘闕する所多く、一貫せる文意を捕ふるに甚だ困難なりと雖、然も明かに年月を附したる記事は、羊の年即ち天寶二年（七四三年）より、鶏の年至德二年（七五七年）に及び（可汗死没の年の前二年に當る）、而して此の間には磨延賧が、前にも引きしが如く、

天寶二載（七四三年）には突厥の烏蘇米施可汗を擒にし、突厥を亡ぼしたること

天寶四載（鶏の年、七四五年）には三姓葛邏祿 (*üc qarluq*) が十姓 (*on oq* 即ち西突厥の後) に逃れ去りたること

天寶六載（豚の年、七四七年）には此の葛邏祿を討ちたること（？）

天寶八載？（虎の年の前年七四九年の記事）の事と思はるる記事には八姓 *Oyuz* (*säkiz oyuz*) 及び九姓 *Tatar* (*toquz tatar*) と屢々 *Selenga* 河邊にて戦を交へて之を破りたること、*Tardus* 及び *Tölis* と *jabru* と *šad*